

信長の造った二条城

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

安

土城跡を見物したおり、天守へと続く大手道の石段に石仏や仏塔が建材として使われているのが眼についた。織田信長は、比叡山焼討ちなど仏教に対する弾圧を行なったが、宣教師のルイス・フロイスを引見したおり、次のように語ったという。

「仏僧は民衆を欺き、己れを偽り、虚言を好み、傲慢で僭越のほどはなほだしいものがある。予はすでに幾度も彼らをすべて殺害し殲滅しようと思っていたが、人民に動揺を与えぬため、また人民に同情しておればこそ、予を煩わせはするが、仏僧を放任しているのである」。

信長がこれほど仏僧を憎んだのは、中世末期の有力宗派が富と権力を蓄え、一大政治勢力となつて信長に敵対したからだ。決して仏教自体を否定し、根こそぎにしようとしたのではない。鳴くのが過ぎてもホトトギスは殺される。「さえざるな、殺してくれろぞ、ホトトギス」。かくして信長存命中、多くの仏教徒は過酷な運命を強いられることとなった。

昭和五十年、京都市上京区の地下鉄烏丸線工事に伴う遺跡発掘現場から石垣の一部が見つかった。地下一・五メートルから発掘された石垣は、信長が室町幕府十五代將軍足利義昭のために建設した旧二条城のものであった。現在の二条城とは全く別物であり、場所

も二条通りではなく、京都御所の西面に沿う烏丸通りから、さらに一本西に入った平安女学院の角に小さい碑が建てられており、それを中心に約三九〇坪四方の敷地に構えられていた。城の名は、歴代の足利將軍家の屋敷を「二条陣」または「二条城」と呼んだことにちなんでいる。

フロイスは著書『日本史』に建設当時の様子を次のように記録している。「建築用の石が欠乏していたので、信長は多数の石像を倒し、頸に縄をつけて工事場に引かした。都の住民はこれらの偶像を畏敬していたので、それは彼らに驚嘆と恐怖を生ぜしめた。領主の一人は、部下を率い、各寺院から毎日一定数の石を搬出させた。人々はもっぱら信長を喜ばせることを欲したので、少しもその意に背くことなく石の祭壇を破壊し、仏を地上に投げ倒し、粉砕したものを運んできた」。この記述の信憑性は、発掘された石垣から多数の石仏が見つかったことにより証明された。

ところで石垣の上には、当然屋敷が建築されたが、ここでも仏僧の災難は続いた。「木材を新たに山や森で伐採せねばならないならば、建築は大いに遅延し、足利義昭様はたいして早く新邸に移ることができなかつたので、信長はなんらの控訴や答弁の余地

を与えず、きわめて巧妙に造られた塗金の屏風とともに、あるがままこの寺院のすべての豪華な部屋を取り壊し、城の中で再建することを命じた」。

犠牲となつたのは法華宗の本山六条本圀寺だった。当時の法華宗は勢力を拡大した武力色の強い教団であり、信長にとっては排除すべき存在だった。宣教師のフロイスは、この記事を「かの傲慢にして悪魔的な寺院の幸いな結末であった」として結んでいる。



旧二条城跡碑

【交通】京都市営地下鉄烏丸線
烏丸下立売駅下車 徒歩3分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。